



TITLE:

唐末の藩鎮と中央權力: 徳宗・憲宗
朝を中心として

AUTHOR(S):

大澤, 正昭

CITATION:

大澤, 正昭. 唐末の藩鎮と中央權力: 徳宗・憲宗朝を中心として. 東洋史
研究 1973, 32(2): 141-162

ISSUE DATE:

1973-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153511>

RIGHT:

東洋史研究

第三十二卷 第二號 昭和四十八年九月 發行

唐末の藩鎮と中央權力

——德宗・憲宗朝を中心として——

大 澤 正 昭

目 次

はじめに

一 德宗朝の藩鎮叛亂

二 代表的藩鎮類型とその性格

三 德宗朝の對藩鎮政策

四 憲宗の「中興」

おわりに

はじめに

私は先に、拙稿「唐末・五代政治史研究への一視點」(東洋史研究 第三二卷第四號)に於いて、堀敏一氏の研究成果を主要にとり上げ、唐末・五代政治史研究に際して、深化すべきと考えられる若干の點に觸れた。ここでは、唐宋變革期研究

の再検討という課題意識に立つて、次のような點に注目した。即ち、政治史展開の把握に於いては、支配權力内部の矛盾の展開——地域的權力としての藩鎮と唐朝統一權力との對應關係の展開——に基軸を据えて考察することが必要である。そして、そのためには、「地域差」をふまえた、藩鎮の性格的差異の分析が重要となる、等の點について述べた。本稿では、このような問題意識に立ち、これまでも多くの研究が積み重ねられてきた、所謂「藩鎮割據體制」の問題をとり上げ、新たな方向での検討を加えたいと考える。

前稿でも述べたように、藩鎮の性格に對する評價は、從來、一律的平面的なものがあり、藩鎮と唐朝との間の複雑な相互關係を總體的に分析されることもなかった。また、藩鎮體制の展開に重要な位置を占める德宗、憲宗朝については、德宗の「姑息」政策と憲宗の「中興」という一面のみが強調して理解され、中央統一權力としての唐朝の一貫した志向が如何なるものであったのかについては注意を向けられなかった。それ故、本稿では一つの方法論として、まず、唐朝と藩鎮の對應關係、藩鎮相互の聯關を分析するという視點に立つ。そしてそこに表現される主要藩鎮の基本的志向から、その性格的差異に言及し、さらに、唐朝の對應を考察してゆきたい。そのことによって德宗、憲宗朝の歴史的 성격にも迫ってみたいと考えるのである。

一 德宗朝の藩鎮叛亂

德宗朝に於ける藩鎮の動向を考えるには、何よりも建中・興元年間（七八〇～八四年）を中心として起こされた藩鎮叛亂をとりあげねばならない。それは、このような動搖の時期にこそ、平常は沈潜している諸勢力の志向が一層明確になると考えられるからである。そして、この時の叛亂も、ただ單に反唐朝を目的とするという平面的なものではなく、叛亂諸勢力の動向にはより複雑な様相が表現されている。各叛亂節度使は、自らの要求を基礎に据えつつ、唐朝の對應、他藩鎮の動向、自藩鎮の内部事情など幾多の要因に規定され、その總體として「叛亂」という行動を起こしているのである。

これまでの研究ではこのような複雑な要因には目を向けず、一般的な叛亂として「藩鎮史を通じてもっとも規模の大きなもの」としてしか評價されない傾向があった。本節ではこのような複雑な藩鎮叛亂の過程を詳細にあとづけることにより、各叛亂勢力の基本的志向を考察してゆきたい。

さて、この時の叛亂展開には、地域的に三つの勢力が表面化する。一つは河北、淮西諸鎮であり、一つは朱泚等の、長安を占領して唐朝の危機を深化させた勢力であり、もう一つは言うまでもなく唐朝及びその支持勢力である。これら三勢力の相互的な聯關の下に情勢が展開すると考えられるので、この點に注意しつつ叛亂の展開を見てゆかねばならない。また、叛亂情勢は全體として四段階を経て終結した。それ故、四段階に於ける要點に觸れながら、まず叛亂の始末を見てゆきたい。^④

第一段階は叛亂の開始から唐朝優勢の段階である。叛亂の契機となったのは德宗の對藩鎮積極策と、これに對抗する所謂跋扈藩鎮との間の對立激化であった。つまり、當時、唐朝支配の大きな阻害要因となっていたのは、安史の亂降將の藩鎮としての跋扈であり、その結果としての唐朝財政の窮迫であった。^④この背景から德宗は、第一に「河朔の舊事」を守り續けようとする河北諸藩への介入に乗り出したのであり、一方、既得權益を守り抜こうとする諸藩鎮はこれに對抗して舉兵するのである。

この時（建中二年〔七八一年〕五月）舉兵したのは、叛亂の契機となった、成徳節度使李寶臣の子李惟岳、それを支援する魏博節度使田悅、平盧節度使李正己、山南東道節度使梁崇義である。彼等はいずれも安史の亂以來の強力藩鎮で、唐朝からの介入に對しては、互いに協力して對處することを約していた間柄であった。^④しかし、この段階にあっては、舊支配體制を回復しつつあった唐朝側の勢力は強力であり、叛亂側を壓倒した。李惟岳は、部下の王武俊に斬られ、田悅は追いつめられた。そして、唐朝は河北介入の第一歩として藩鎮細分化を試み、易定滄節度使、深趙都團練使の二藩鎮設置を命

ずることとなる。

第二段階は、この唐朝の政策によって引き起こされる叛亂擴大の時期である。

河北に新たに二藩鎮を設置することは、唐朝に附いていた幽州節度使朱滔にとっても、成徳軍兵馬使王武俊にとっても、一つの不満と危機感を與えるものであり、これを利用した魏博田悅によって叛亂の新たな局面が開かれる。即ち、田悅は朱滔、王武俊を叛亂に引き込むわけであるが、その時の説得の内容は次のようであった。

① 徳宗が朱滔に深州を與えなかったことは約束違反である。

② 唐朝のねらいは河北をすべて掌握しようとするところにあるから、魏博が破れば、次には、當然、成徳・幽州がねらわれる。

③ 朱滔に貝州を割譲しよう。

④ というものであり、この主張の重點は言うまでもなく②にあった。つまり、唐朝の河北介入という危機感を煽ることによって朱滔を叛亂へ起たせたのである。

かくて朱滔の反唐朝の意志は決せられるが、この時の彼の藩鎮内部の動き、殊に兵士集團の動向には注意しておかねばならない。即ち、朱滔が唐朝側の軍への攻撃命令を下した時、軍士達はそれに應じようとせず、數十人を斬ることによって彼の命令を貫徹させた事件^⑤、並びに、田悅の救援に趨こうとした時、反對した兵士二百餘人を斬り、朱滔の意志を通さざるを得なかった事件の二つである。ここでの兵士達の主張は、自分の土地を離れて戦争に参加することへの反撥がその主なものであった。つまり、彼等は、所謂「傭兵」の如く、報酬さえあれば藩帥の意のままに動くという軍隊ではなく、何らかの形で在地との強いつながりを持っていた軍隊であると考えられる。ここに河北藩鎮の性格の一端が窺えるのである。

さて、朱滔、田悅の協力關係が成立すると共に、王武俊も加わって唐朝に反旗をひるがえし、ここに幽州・成徳・魏

博・平盧四節度使の聯合が成り、建中三年（七八二年）十一月には戰國時代七國の故事に則って、朱滔を盟主とする盟約が結ばれることとなる。さらにこの四藩鎮は、汴州を占領して勢力の強大になっていた淮西李希烈を中心に据え、ここに五藩鎮による對唐朝戦線が現出することとなった。

ところで、先の河北四藩鎮の盟約には彼等の目的とする所が表現されていて興味深い。通鑑に「俱に王を稱して年號を改めず、昔、諸侯が周家の正朔を奉じた如くに云云」と議論の内容が記されている如く、彼らは、唐朝の存在自體を否定はしていなかったのである。むしろ、唐朝支配の強化に對してのみ反抗するという意味合いが強かったと考えられる。そして、この河北諸藩の志向性が結局は唐朝による叛亂切り崩し成功の要因となるのである。

第三段階は、長安で朱泚が叛亂を起こしたことによって引き起こされる新たな段階である。朱泚の亂の結果として、叛亂は全國的な規模に擴大されたかの如くに見えるが、その實、河北では對唐朝の聯合戦線が分裂するという情勢にも進むのである。

長安に於ける、朱滔の兄朱泚の叛亂は、直接的に唐朝中樞を攻撃し、德宗を長安から追い出した所に意義があった。この統一權力の主體たる唐朝の動搖は、全國の藩鎮に少なからぬ影響を與え、事態の歸趨を靜觀させる結果となった一方で、朱泚の勢力もその内實とは逆の確固たる勢力としての評價を與えられた。このような朱泚の、朱滔と呼應して唐朝支配にとって代ろうとする勢は、殊に河北の叛亂勢力に深刻な波紋を投げかけたのである。結果的には、王武俊、田悅が唐朝と結ぶことになるが、彼らがこの行動をとった理由は次の二點にまとめられる。

① 前述の朱滔の強大化に對する脅威

② 「奉天改興元元年赦」^①によって既得權益が認められたこと

であり、ここにも河北諸鎮の重要な性格が表現されている。つまり、自らの收奪體制へ介入する恐れがあれば、それが唐朝であろうと他藩鎮であろうと反抗してゆくのである。

このような河北戦線の分裂は、叛亂を最後の段階に終結へと導いてゆく。即ち、叛亂側は、幽州の朱滔、淮西の李希烈、長安の朱泚とに分斷され、さらに河北から長安に集中してくる唐朝軍によって、不満分子の寄せ集めに過ぎなかった朱泚は敗れることとなる。また一度は皇帝を稱した李希烈は依然頑強な抵抗を續けるが、朱滔は叛亂勢力の衰退と共に幽州へ引き上げざるを得なくなる。

ここで注意しておかねばならないのは、この時の王武俊の行動である。彼は叛亂の歸趨が決定的となっていた段階で、唐朝より幽州節度使の地位をも與えられていたが、この地位を自ら辭退した。^⑧つまり、朱滔の支配地であった幽州藩鎮を自分の支配下に入れることが可能であったにもかかわらず、これを辭退し、朱滔の地位を保障してやる行動をとったのである。ここには、自分に對する直接的脅威がなくなれば他藩鎮の存在を認めるといふ王武俊の志向が見られる。

以上、藩鎮叛亂を四段階に分けて検討してきたが、この過程の中から、次のような二つの類型の叛亂藩鎮を抽出することができであろう。それは、對唐朝という視點に立った時、一つは河北諸鎮の如く、唐朝を否定するのではなく、その介入の強化にのみ對抗し、在地性の窺える類型であり、一つは、朱泚、李希烈等の如く、自らの權力をうち立てようとする類型である。こう見る時、叛亂藩鎮の動きは必ずしも一樣に見ることはできず、各々の異なる基本的志向が存在していることを認めないわけにはゆかない。次には、これら藩鎮の基本的志向を確認しつつ、さらにその背景についても考察してみなければならぬ。

二 代表的藩鎮類型とその性格

前節に見た如く、藩鎮叛亂の過程には、二類型の藩鎮を抽出し得るわけであるが、この他に、唐朝を經濟的に支持し續けた藩鎮もまた存在した。これら三類型の藩鎮を、ここでは對統一權力という觀點から、(A)分立志向型、(B)權力志向型、

(C)統一権力支持型、と呼んでおきたい。そして、本節では、これら三類型の藩鎮について、各々の基本的志向をより明確化すると共に、その内包する性格的差異をも検討してゆきたい。

(A) 河北三鎮を中心とする類型——分立志向型——

叛亂過程で河北諸鎮が示した運動原理は次のようにまとめることができる。

(i)中央統一権力⇋唐朝は藩鎮支配の維持にとって否定し難い存在である。

(ii)唐朝、他藩鎮を問わず、自らの收奪體制に介入しようとする勢力には一致協力して反抗する。

(iii)藩鎮を構成している兵士には「在地性」の強さが見られる。

(iv)従って河北諸鎮を基盤としては新たな統一権力の擔い手は成長し難い。

以上のような志向が見られるわけであるが、これを「分立志向」型と呼びたい。

かような運動原理は唐朝側官僚の分析する所によっても確認できる。徳宗朝の重臣陸贄は「河朔藩鎮は急があれば力を合わせるが、それがおさまれば互いに憎みあっている。これみなその場限りのものであり、禍となることは少ない」と指摘し、河北諸鎮の前述した如き志向を述べているし、憲宗朝の宰相李絳は、河北三鎮の中の成徳軍を劍南西川、浙西節度使と比較して次のように見る。「成徳では、内には歳ごとに團結が強まり、外には他藩鎮との結合が益々廣がっている。そして將士・百姓達は代々保護されてきた恩を感じており、天子と節度使との間の守るべき君臣關係も知らない。」^④として、成徳軍の在地との結びつきの強さを語っている。また、杜牧は、河北の獨自性を保障するような、自給自足が可能なほどの生産力の高さと、天下に占める位置の重要性を述べている。^⑤

以上の各人の指摘を見れば、河北の「分立志向」という性格がより明確になってくる。就中、在地性の強さについての指摘には注目しておかねばならない。それは、從來一律に言われてきたような藩鎮軍の「傭兵」的性格とは相容れないものだからである。そして、この在地性は河北諸鎮に特有のものであったと考えられる。

この反映として、周知の如き軍編成の方式が史料に残されているのではないか。即ち、魏博・昭義（澤潞）各節度使の軍編成の方法は、戸口の多寡を計って徴兵し、或いは、丁男の三人に一人を徴發するものであった。この他の藩鎮の軍編成方法については、他に史料が残されていないので斷定することはできないが、後述する四川の劉闢や浙西の李錡の軍が明らかに傭兵であったことからすれば、魏博・昭義に代表される河北の徴兵方法がより在地的であったことは十分考えられる所である。そして、その結果として藩鎮の在地的性格が附加されるのである。

また、もう一つの河北藩鎮の特徴は、李絳が特に分析している如く、一人の軍將がすべての權力を握るのではなく、幾人かの軍將に分散して軍を統率させる體制であり、相互に牽制させることによって、藩帥の支配を維持している、と言われる點である。李絳はこの體制を河南・河北跋扈藩鎮、即ち淮西、河北諸藩鎮独自の政策的なものであるかの如くに見ているが、この軍將の比重の大きさより考えれば、むしろ、河北諸藩により特有な體制であると考えられる。

河北諸藩には、節度使の死によって後繼者が立つ場合、唐朝の認可が得られず動搖する例が屢々見られるが、この藩帥動搖への壓力が「三軍」と表現されていることは、これら軍將が藩帥廢立に於ける壓力となっていたことを裏づけるものである。またそれは唐朝の「權威」が背景に無ければ、軍將達は藩帥を認めないという動きがあったことをも窺わせるものである。つまり河北諸藩に見られる藩帥の不安定性は、宣武軍等に於ける驕兵の問題とは別に、以上見たような、在地性の強い軍を背景とした軍將達による所が大きいと考えられるのである。

こう見てくるならば、河北の「分立志向」の背景には、河北藩鎮の性格が反映しているのであり、從來言われた如く、他藩鎮を含めて一律的に「傭兵」的性格とは見ることができないであろう。

(B) 唐朝權力を否定する類型——權力志向型——

叛亂の過程に於いて明確に唐朝を否定し、自らの權力を創出しようとする行動をとったのは、朱泚と李希烈であった。彼らに共通する特徴は、兵力、財力の一方又は雙方の優位という背景に立って唐朝を否定し、自らの權力を作り出そうと

するが、在地的基盤は非常に弱いかほとんどないであろう。特に淮西の李希烈はそのような勢力の典型と見ることが出来る。不満分子にかつぎ出されて叛亂に決した朱泚よりも、自らの意志と力で支配基盤を固め、さらに皇帝を稱するに至った李希烈には、より明瞭に彼らの基本的志向が表現されていると考え得るのである。次に、李希烈の叛亂への背景を検討することにより、(B)權力志向型藩鎮の基本的志向の背景を考えたい。

李希烈が皇帝と稱し得た最大の要因は、通鑑に記されている通り「兵強財富」であつたと考えられる。淮西は、玄宗朝に西北の異民族を移住させたことなどもあつて、「兵強」という要素が作られていたが、しかし、「財富」とは結びついておらず、周邊からの略奪を大きな財源としていたようである。⑥。それ故、この「兵強」と「財富」が結合された時、即ち汴州を占領し、その財を獲得した時、はじめて李希烈は皇帝と稱するに至つたのである。

當時、汴州一帯は江淮漕運の中心地であり、全國的な流通經濟の一大據點となつていた。そして、この一帯を支配する者が如何に莫大な利益を得ていたかは宣武軍節度使韓弘の例によつても明らかである。⑦。彼らは自ら手を下している漕運から利を上げるのみならず、流通經濟を把握することによつて、計り知れない貨財を得ていたと豫想される。その一例として、宣武軍節度使王智興が、支配下の泗口に於いて税(恐らく商税)をかけ、軍の用度にあてたという記事があげられるが、⑧。この他にも、様々な手段によつて私的に蓄財することは容易なことである。

ともあれ、李希烈が皇帝を稱し得た背景を「兵」と「財」の一致にあつたと考える時、後、唐朝を倒した朱全忠が「廳子都」を編成するに際して汴州の「富家子弟」を集めたという事實とかなり共通した志向を感じさせる。即ち、統一權力獲得を目指す二勢力が、このような流通經濟の把握乃至は豊富な財源の把握を必要條件としていたことは興味深い。

(B)型藩鎮としての性格を以上のように考える時、當然、兵力としての「傭兵」の存在をも認めねばならない。宣武軍の驍兵、徐州の「銀刀都」或いは仇甫の亂平定に功のあつた「黃頭軍」等の強力な軍隊が豊富な財力をバックに編成され、節度使廢立にも多大の影響力を持つほどになるのである。

(C) 唐朝を支えている類型——統一權力支持型——

以上の如き叛亂藩鎮の他に、唐朝を支持し續けた藩鎮類型についても觸れておかねばならない。

叛亂當時、奉天へ避難した唐朝を迎え入れようとしたのは、陸贄も述べている如く、劍南西川節度使張延賞と浙江東西節度使韓滉であつた^⑤。また、苦境にあつた唐朝に援助を續けたのは江南西道節度使曹王(李)皋であつた^⑥。

このように主として、江南、四川の節度使が唐朝支配を支え續けたのであるが、その背景の一つは、勿論官僚支配の徹底であり、既に松井秀一氏も指摘する所である^⑦。

ここで注目しておくべきは、藩鎮軍のあり方である。即ち、李錡の例に見られるように軍の中核は純粹の傭兵であつたことであり、且つ州刺史まで節度使の支配が貫徹していなかつたことである。さらにこれら州刺史は、叛亂に對して「郷閭の子弟」を集めて對抗している點にも注意しておかねばならない。この後も、仇甫の亂に際しては「土團の子弟」千人或いは四千人を短時日のうちに集め、叛亂に對抗している^⑧。

このような、藩帥個人の一圓的支配が成り立ち難いという(C)型藩鎮の性格は、官僚支配の徹底と共に、江南、四川の生産力、土地經營様式によつて規定される所が大きいと考えられるが、より詳細に検討されねばならないであらう。

以上、(A)(B)(C)三類型の藩鎮について検討してきたわけであるが、各類型の持つ基本的志向はより明確になされ、藩鎮總體を決して一律的に考えることができないことも明らかになつたと考える。それでは、このような藩鎮に對して唐朝はどのような對應をし、その支配をどのようにして貫徹させたか、が次節の課題となる。

三 德宗朝の對藩鎮政策

從來、德宗朝の政策は「一郡一鎮兵有れば必ずこれに姑息す^⑨」と言われるような「姑息」政策の面が強調されて理解されてきた。この結果として唐朝支配が後退し、藩鎮の跋扈が一層激しいものとなつたのである^⑩。しかし、このよう

な理解は極めて一面的であるし、その結果、中央統一權力として絶えず自己の支配貫徹を圖る唐朝の一貫した志向を見落してしまふことになる。又、憲宗の「中興」へ至る過程も、皇帝個人の資質の問題に解消されてしまい、支配貫徹への一貫した方向性を見失ふことになる。それ故、本節では、皇帝個人の資質をも含み込んだ形で展開される唐朝の支配維持・貫徹の志向を検討することが必要となる。

さて、徳宗朝の政策を分析するには、陸贄（陸宣公）の主張をまずとりあげねばならない。彼は、徳宗即位の大暦十四年（七七九年）翰林學士に拔擢されてより、貞元十一年（七九五年）忠州別駕に左遷されるまでの約十五年間、徳宗の信頼を一身に集め、殊に藩鎮叛亂の困難な局面にあっては、ほとんどの詔敕が彼の手になるなど、徳宗にとって必要不可欠の側近官僚となっていた。宰相をしのぐ權威を持っていた彼は、當時「内相」と稱されたと云う。それ故に、徳宗朝の對藩鎮政策の基本は大部分彼に依據していたと考えられるし、まず第一に彼の主張を検討することが必要なのである。

陸贄の主張する所はかなり多岐にわたるが、大きくは二點に集約される。第一點は、統一權力としての唐朝の存在を確認し、その權威の確立を圖ろうとするものであり、第二點は當面する情勢に於いての具體策、即ち對藩鎮という面で、叛亂藩鎮の性格、實狀を分析した上での現實的對應策である。

第一の點については、當時の全國的な叛亂情勢について「全國の藩鎮は各々叛亂側につくべきか、唐朝側につくべきか、事態を見守っており、いささかの手違いも許されない」という認識の下で、唐朝の統一權力としての地位が危機に瀕しているとして主張される。

この主旨の主張が初めてなされるのは、徳宗が奉天府から興元府へと避難しつづつあった時である。この時、百姓の「瓜果」を獻ずる者があり、これに感激した徳宗は彼に爵位を與えようとした。陸贄はこれをとどめて、「當今の病む所は、まさに爵輕きにあり」として、徳宗を諫めるのである。彼はこの時すでに、貴族の秩序の象徴たる「爵」が輕んぜられており、それと比例して唐朝の權威も失われつつあることに氣づいていた。そして、この權威の失墜をくい止めるべく警告

を發したのである。

かくの如き主張は朱泚の亂が終結し、唐朝が長安を回復した後は、より明確な形でうち出されてくる。即ち、時に朱泚の降將李楚琳が鳳翔節度使として任命されていたのであるが、これを交替させるべきであるという議論が起こつてくる。この議論に對して陸贄は、李楚琳が害を爲し得ないという情勢を分析した上で、まず唐朝の體制を整え、威令を復活した後に李楚琳を交替させるべきであるとする。

また、貞元元年（七八五年）河中の李懷光を平定した後、その勢に乗じて淮西の李希烈をも討伐せよという議論が起こつてくるのに對しても、陸贄は唐朝の權威確立を急務として反對論を展開する。その概要は次の通りであつた。即ち、建中年間以來の叛亂は一應の平靜に歸し、唐朝がその地位を復活したことによつて天下の情勢は大いに變化した。しかし、今淮西の李希烈を討とうとするならば、殘存している反唐朝の諸勢力は、次に自分が狙われるであろうことを恐れ、再び叛亂に向うであらう。故に現在の唐朝のなすべきことは、皇帝としての『惠と威』をより確固たるものとするにある。李希烈に對しては、孤立策をとつて十分な注意を拂えば自ずから害はないであらう、と。徳宗はこれに従つた。

以上の如く、まず第一に、まさにこの時期に、唐朝のなすべきこととして、中央統一權力Ⅱ唐朝の權威の復活と確立が第一義的に主張されるのである。陸贄は中國統一王朝の支配維持に於ける、イデオロギー的支配の重要性を十分に認識していたと言えるであらう。

この結果、貞元年間にはここで確立された唐朝の權威が河北藩鎮に對して大きな役割を果すこととなる。つまり、貞元六年（七九〇年）、同八年（七九二年）に起こつた平盧軍、成徳軍の間の抗争に對して、唐朝は兩藩鎮の調停者として登場し、和平を成立させる。ここでは、藩鎮の上に立つ統一權力としての唐朝の權威を生かし、且つ、統一權力としての存在を他藩鎮すべてに示しているのである。

次に、陸贄の主張の第二の點についてはどうか。前にも觸れた如く、彼は「論兩河及淮西利害狀」に於いて、

「ただ賄賂なるのみ」(「通鑑表微」卷二〇)と評しているが——を奨励したことであった。即ち、回復した唐朝の權威に貴族制的爵位賜與權を最大限に利用し、租稅收入よりも、より安易に、より多額の收入を確保しようとする。そして、この對象となる藩鎮は、當然、前述(C)型藩鎮をおいて他にないのである。即ち、舊唐書食貨志にある如く、劍南、江西、揚州(淮南)、宣州(歙宣池)など四川、江南の各藩鎮から「日進」「月進」と稱せられるほどの進奉が寄せられたのである。^④さらに進奉は憲宗朝でも行なわれ五代へと續いていった。

かくの如く唐朝は、(C)型藩鎮よりの收奪を一層苛酷なものとすることによって支配を維持し續け、憲宗朝の「中興」へと聯なつてゆく。しかし、一方では、貨幣經濟の發展が促進され、唐朝支配を根底から掘り崩してゆくのである。

以上を要するに、徳宗朝の對藩鎮政策の本質は、各藩鎮の持つ性格を分別して巧みに利用し、自らの中央統一權力としての存在を確立、保持する所にあつたと言える。つまり(C)型藩鎮に經濟的に依據しつつ、(B)型藩鎮の出現を抑壓し、(A)型藩鎮には、その統一權力を否定し得ないという弱點を利用して、徐々に支配下に組み入れようとするものであつた。徳宗の所謂「姑息」政策の内實はかくの如きものであり、あくまでも、唐朝支配の維持貫徹を主眼としたものであつた。ここに、憲宗の「中興」へと發展してゆく要因を内包していたのである。

四 憲宗の「中興」

前節まで徳宗朝の藩鎮・唐朝の對應關係を分析しつつ、その基本的志向と背景について検討してきた。それでは、次の憲宗朝に於いてこれら唐朝・藩鎮の對應關係はどのように發展し、また、「中興」は如何なる過程を経て達成されたのであろうか。本節では、再び唐朝と藩鎮の對應關係に注目し、「中興」達成までを三期に分つて分析することにより、各勢力の志向の展開並びに「中興」の本質を探つてゆきたい。

第一期は憲宗の對藩鎮積極策が確立した時期である。それは、前にも觸れたような四川の劉闢、浙西の李錡が叛亂を起こし、短期間で平定されたこと、また、平盧節度使が唐朝へ一つの讓歩をせざるを得なくなったことに表現される。

元和元年（八〇六年）、劍南西川に於いて劉闢が、同二年、浙西で李錡がそれぞれ叛亂を起こすが、共に支配基盤の弱さから短時日のうちに平定される。この弱さは前述したように、軍の中核が傭兵軍であり、且つ、彼らの支配が支郡にまで及んでいなかったという事實に示されている。それ故、戦後處理も叛亂首謀者を除くことのみであり、その他はすべて舊體制そのままに残されたのである。^④

一方、これらの叛亂に際してとった唐朝の對應も巧みなものがあつた。つまり、叛亂の全國波及を恐れて、最も注意すべき河北諸鎮に對しては、官位を上げるといふ對策をとり叛亂への同調を抑えるのである。^⑤この結果、劉闢、李錡の叛亂は容易に平定され、また、平盧節度使の後繼問題に對して、唐朝が節度使任命を拒否しても、隣藩が干涉に乗り出してくることはなかつたのである。かくて唐朝は、四川、浙西の叛亂平定に全力を集中することができたし、また、節度使任命拒否によつて起こつた平盧軍内の動搖を利用して、兩稅上供、唐朝による官吏任命、鹽法の實施を内容とする平盧節度使の讓歩を獲得したのである。

第一期に見られるこのような動きは、唐朝の志向が、河北藩鎮に對しては(A)型藩鎮としての性格を利用して牽制する、或いは支配を侵透させ、(C)型藩鎮の叛亂にはその平定に集中して財政的基盤を確保する、という點にあつたと見る事ができるであらう。ここに、方針を確立した憲宗は、淮西、河北の介入へと進むのである。

第二期は、第一期の成功を基礎に、河北、淮西への介入に踏み出した時期である。

元和四、五年（八〇九、一〇年）の成徳王士眞、淮西吳少誠の死を機として唐朝内部には、この兩藩鎮への介入が議論されるが、ここには唐朝の目的とする所が窺い得る。憲宗と官僚との間には意見の相違があつたが、李絳を代表とする官僚

の主張は淮西を先にすべきであるとするもので、次のようなものである。即ち、「淮西の四周はすべて、唐朝支配のゆきわたっている州縣であり、（河北などの）叛亂勢力とは通謀できない情況にある。朝廷が節度使を任命するのは今が正にその時であり、萬一受け入れなければ、征討も考えねばならない。成徳の『致し難きの策』を捨てて、淮西の『成し易きの謀』につくべきである。」という主張であり、前述陸贄の主張と多くの共通点を持っている。このことは憲宗個人の考え方は別として、河北、淮西に對する唐朝の意向が徳宗朝以來一貫していることを示している。

一方、河北諸鎮では各藩鎮獨自の動きを示すが、基本は徳宗朝に見られた「分立志向」の動きである。まず成徳軍内では、唐朝からの節度使任命が得られないことから動搖が起り、王承宗は二州を分割するという條件のもと、節度使任命を求め唐朝もこれを認めた。ところが魏博節度使田季安は隣藩の動搖に危惧を抱き、王承宗を欺くことによって、唐朝に叛旗をひるがえさせることに成功する。また、幽州の劉濟は、昭義軍節度使盧從史が成徳と結んでいることを察した上で、唐朝に加擔するのである。このように河北内部では、唐朝に反抗する成徳、魏博それに昭義があり唐朝の側には幽州が立つというように相互に對立していた。しかし、幽州が唐朝側に立つたとしても、後により明瞭になるが、そのねらいは唐朝より給される所謂「食出界糧」にあつたようであり、親唐朝、反唐朝の區別はあつても、河北内部での戦鬪は積極的なものではなかつたと考えられる。

他方、河北征討軍の内部にも、宦官が總指揮權を握つたことに對する反撥も大きく、成徳征討は進展が見られなかつた。このような情況から、憲宗は昭義軍節度使盧從史が強制送還されたのを機に、成徳征討を中止することとなるのである。

以上の如く、第二期は河北介入の挫折の時期であつた。唐朝は淮西の後繼者を認可した上で、河北に力を集中したにもかかわらず得られた成果はほとんどなかつた。ここには、再び河北の根強い「分立志向」の性格が表面化してその力を發揮し、さらに、本来河北三鎮を制する役割を與えられていた昭義節度使^⑤までが、河北三鎮に同調することとなつたのであつた。

第三期は、これまでの教訓をふまえて「中興」が達せられた時期である。その成功の最大の要因は淮西への攻撃集中とその解體に成功したことである。

元和九年（八一四年）淮西吳少陽の死によって、再び第二期と同じ情勢が展開されるが、やはり唐朝による征討は進展しない。その事情は幽州節度使劉總の動きに明白に示されているところである。彼は王承宗征討の命を下すよう積極的に唐朝にはたらきかけたにもかかわらず、征討の命が下るや、自分の領域からわずかに「五里」進出したのみで、しかも、月々十五萬緡の度支錢を得ていたのである。彼の目的とする所は、成徳軍征討ではなく、唐朝より支給される貨幣にあったのである。そしてこの結果河北が強大になることは白居易の恐れた所でもあった。

かくて、唐朝は元和十二年（八一七年）河北から撤兵し、淮西に全力を集中することとなる。この結果、李愬等の活躍もあって淮西征討を達成することができた。そして、李希烈以來三十餘年間、唐朝支配の障害となってきた淮西藩鎮は、領域が三分されることにより、全く解體されることとなる。

この淮西征討の影響は大きく、河北諸鎮も競って唐朝に降伏する。しかし、平盧のみは反抗を續け、遂には武力討伐されるわけであるが、この時の戦後處理も亦淮西以上に徹底したものであった。人口、土地、軍隊、資産等を調査の上で均等に三分するという方法がとられ、平盧藩鎮の再現に對して嚴重な注意が拂われたのであった。

以上によって、憲宗の「中興」が達せられたのであるが、この成果を確保するために刺史への軍事權分散という對策がとられた。^⑤しかし、この政策は河北ではほとんど效力を持たなかったことは明らかである。それは前述の「中興」達成の經過からもわかるように、唐朝の河北支配は極めて表面的なものであったからである。それ故に、この對策のねらいとする所は、(B)(C)型藩鎮、殊に(B)型藩鎮抑壓の意味合いが強かったと考えられる。何故なら、李錡の場合に見られた如く、(C)型藩鎮に於いては刺史の果す役割は、既に、重要なものがあつたからである。そして、この對策がある程度の効果を上げたことは、日野開三郎氏が一般的に指摘された所でもあつた。

さて、以上三期に區分して憲宗の「中興」達成の過程を見てきたわけであるが、この過程に表出された各勢力の志向は、(B)型藩鎮がその志向を明確になし得ない情況になっていた他は、ほぼ徳宗朝と同様である。しかしながら、強化された唐朝財政は、徳宗朝の如き唐朝・藩鎮間が均衡状態にあることを許さなかったのである。そして、軍事権の分散という対策をとることによって、藩帥個人への軍事権集中を抑壓し、(B)型藩鎮の出現を豫防することに成功したのであった。ここに、憲宗の「中興」の歴史的役割の一端が窺い得るし、かくて唐朝は以後八十餘年間の延命の基礎を築いたのである。

おわりに

以上、藩鎮と唐朝の對應關係を検討し、そこに表出された各勢力の基本的志向とその背景を考察するという方法論をもって、徳宗、憲宗朝の政治史展開を考えてきた。ここに指摘できたことは、(A)(B)(C)型に分類した如き藩鎮類型を抽出し得たことと共に、それと密接に對應しつつ、唐朝の支配貫徹が實行されたことであつた。憲宗はこのような諸勢力の志向を巧みに利用して「中興」を達成したのである。そして、この過程を見てゆく時、支配階級内部に於ける、更なる矛盾の展開は、「藩鎮割據體制」の枠を越えた農民叛亂によってになわれる部分が大きいことを豫想させるのである。

このように、唐末の政治史展開に於いては、唐朝、藩鎮の複雑な連關をたどることによって、根底に於いては生産力の發展に規定されながらも、政治史がもつ独自の發展過程を把握することが可能であり、そこから、さらに新たな歴史像を探ることができると思われるのである。本稿では、徳宗、憲宗朝を中心に検討してきたわけであるが、今後さらに、宋初までをも対象とした政治史展開が新たに検討されねばならないであらう。

註

① 栗原益男「安史の亂と藩鎮體制の展開」岩波講座世界歴史6。

③ 通鑑卷二二六建中元年七月の條

鑑と略す、兩唐書、冊府元龜の關聯部分を總合して述べてある。

② 以下の敘述に於いては、特に觸れない限り、資治通鑑（以下通

初、安史之亂、數年間、天下戸口什亡八九、州縣多爲藩鎮所據、

④ 貢賦不入、朝廷府庫耗竭、
舊唐書卷一四二李寶臣傳

與薛嵩・田承嗣・李正己・梁崇義等連結姻婭、互爲表裏、意在
以土地、傳付子孫、

⑤ 舊唐書卷一四一田承嗣傳附田悅傳

說朱滔曰、……又聞、司徒離幽州日有詔、得(李)惟岳郡縣、
使隸本鎮、今割深州與(康)日知、是國家無信於天下也、且今
上英武獨斷、有秦皇・漢武之才、誅夷豪傑、欲掃除河朔、不令
子孫嗣襲、(中略)如馬燧・(李)抱真等破魏博、後朝廷必以
儒德大臣、以鎮之、則燕・趙之危、可蹙足而待也、若魏博全、
則燕・趙無患、田尚書必以死報恩義、合從連衡、救災卹患、
春秋之義也、……尙書以貝州奉司徒、命某送孔目、惟司徒熟計
之、滔既有貳於國、忻然從之、

⑥ 新唐書卷二二朱滔傳

軍中不應、三號之、乃曰、幽人死於南者、骸擲不揜、痛藏心髓、
奈何復欲暴骨中野乎、司徒兄弟受國寵、士各蒙官賞、顧安之、
不卹其它、滔罷、潛殺不可共亂者數十人、

⑦ 同前

即引兵救(田)悅、次東鹿、軍大譟曰、天子令司徒北還、而南
救魏、寧有詔邪、……滔回、次深州、誅首變者二百人、衆懼、
通鑑卷二二七建中三年十一月の條

於是幽州判官李子千、恒冀判官鄭滯等共議、請與鄆州李大夫爲
四國、俱稱王而不改年號、如昔諸侯奉周家正朔、築壇同盟、有
不如約者、衆共伐之、不然、豈得常爲叛臣、茫然無主、用兵既
無名、有功無官爵爲賞、使將吏何所依歸乎、滔等皆以爲然、

⑨ 全唐文卷五二六朱泚「遣弟滔書」にその意氣ごみが記されてい
る。

涇原・四鎮士馬爭驅、隴右・鳳翔、獻書繼至、三秦之地、指日
克平、吳・蜀之間、已令宣示、河北一路、用卿殄除、布新令以
示之、推利害以誘之、懸爵賞而招之、張皇威而逼之、驅鐵騎以
臨之、橫行洛陽、與卿大會於定鼎、

⑩ 田悅の軍内で行なわれた議論にその深刻さが窺われる。通鑑建
中四年十二月の條、

司武侍郎許士則曰、……滔爲人如此、大王何從得其肺腑而信之
邪、彼引幽陵・回紇十萬之兵、屯於郊坰、大王出迎、則成擒矣、
彼囚大王、兼魏國之兵、南向渡河、與關中相應、天下其孰能當
之、大王於時悔之無及、

⑪ 唐大詔令集卷五

其李希烈・田悅・王武俊・李納及所管內將士・官吏等、一切並
與洗滌、各復爵位、待之如初、

⑫ 冊府元龜卷四〇九將帥部退讓二

王武俊、與元初、爲成德軍節度兼幽州盧龍兩道節度、表讓幽州
盧龍一節度、帝許之、

⑬ 陸宣公集卷一一「論兩河及淮西利害狀」

又此郡兇徒、互相劫制、急則合力、退則背憎、是皆苟且之徒、
必無越軼之患、此臣所謂幽・燕・恆・魏之寇、勢緩而禍輕、
全唐文卷六四六李絳「論河北三鎮及淮西事宜狀」(李相國論事
集卷三「又上鎮州事」とは異同が多い。)

成德則不然、內則膠固歲深、外則蔓連勢廣、其將士・百姓懷其
累代煦暉之恩、不知君臣順逆之理、諭之不從、威之不服、將爲

朝廷羞、

⑮ 樊川文集卷五「戰論」

河北視天下、猶珠璣也、天下視河北、猶四支也、珠璣苟無、豈不活身、四支苟去、吾不知其爲人、……是以出則勝、處則饒、不窺天下之產、自可封殖、亦猶大農之家、不待珠璣、然後以爲富也、

⑯ 前註⑭で李絳は劉闢・李錡の軍について

劉闢・李錡獨生狂謀、其徒皆莫之與、闢・錡徒以貨財啗之、大軍一臨、則俛然離耳、

と述べ、また新唐書卷二二四上李錡傳には

(李) 錡得志、無所憚、圖久安計、乃益募兵、選善射者、爲一屯、號挽硬隨身、以胡奚雜類糾須者、爲一將、號蕃落健兒、とあつて、その備兵軍の様子がわかる。

⑰ 李相國論事集卷五「論魏博」

(李) 絳曰、凡河南・河北叛渙之地、事體大同、懼部下諸將有權、恐得便圖己、各令均筭兵馬、不令扁在一入、使力敵權均、爲變不得、若廣興諸將計會、必謀洩不同、若一將爲變、自然兵少不濟、以此相制、先動不得、

⑱ 一例として平盧軍ではこのような軍將を統制するために、その妻子を人質にする場合もあつたほどである。舊唐書卷一二四李正己傳附李師道傳に

自正己至師道、竊有鄆・曹等十二州六十年矣、懼衆不附己、皆用嚴法制之、大將持兵鎮于外者、皆質其妻子、或謀歸款於朝、事洩、其家無少長皆殺之、以故能効其衆、

⑲ 成德軍王承宗の場合は通鑑卷二三八元和四年八月の條に

(王) 承宗受詔甚恭、曰、三軍見迫、不暇俟朝旨、請獻德・棣二州、以明懇款、とある。

⑳ 卷二二九興元元年正月の條

王武俊・田悅・李納見敕令、皆去王號、上表謝罪、惟李希烈自恃兵強財富、遂謀稱帝、……希烈遂即皇帝位、國號大楚、改元武成、

㉑ 築山治三郎『唐代政治制度の研究』第四章で述べられている。

㉒ 通鑑卷二四一元和十四年七月の條。

㉓ 藩鎮が漕運を扱っていたことは王鳴盛『十七史商榷』卷八十九楊子院の項に

愚案唐時、天下財賦、轉運使掌外、度支使掌內、雖有此分、然此等使名、實無定員、其爵秩職掌、隨時變易、有以宰相兼領者、有以節度・觀察等使兼領者、……至轉運、雖有特遣使者、而中葉後、節度・觀察之兼之者尤多、

と述べられている如くであり、また唐語林卷一には
始於揚州轉運、船每以十隻爲一綱、載江南穀麥、自淮・泗入汴、抵河陰、每船載一千石、揚州遣軍將押至河陰之門、填闕一千石、轉相受給、達太倉、十運無失、卽授優勞官、汴水至黃河迅急、將吏・典主數運之後、無不髮白者、とあつて、軍將、將吏が漕運に關係していたことがわかる。

㉔ 新唐書卷一七二王智興傳

(王) 智興由是攀索財賂、交權幸、以賈虛名、用度不足、始稅泗口、以佐軍須、

㉕ 陸宣公集卷一五「興元論解蕭復狀」

凡在戀主之誠、各懷後后之志、是以(張)延賞奉迎於西蜀、韓
曄望幸於東吳、此乃臣子之常情、古今之通理、

26 通鑑卷二二九建中四年十一月の條。

27 松井秀一「唐代後半期の江淮について」史學雜誌第六六編第二
號。

28 通鑑卷二二七元和二年十月の條。

湖州刺史辛祕潛募鄉閭子弟數百、夜襲趙惟忠營、斬之、

29 同前卷二五〇咸通元年四月の條

於是閱諸營見卒及土團子弟、得四千人、使導軍分路討賊、府下
無守兵、更籍土團千人以補之、

30 唐國史補卷中

德宗自復京闕、常恐生事、一郡一鎮有兵、必姑息之、

31 日野開三郎『支那中世の軍閥』以來の一般的な見解である。

32 舊唐書卷一三九、新唐書卷一五七陸贄傳。

33 陸宣公集卷一六「興元請撫循李楚琳狀」

以諸鎮危疑之勢、居二逆誘脅之中、洶洶羣情、各懷向背、賊勝
則往、我勝則來、其間事機不容差跌、

34 同前卷一四「駕幸梁州論進獻瓜果人擬官狀」「又論進瓜果人擬
官狀」。

35 同前卷一六「論替換李楚琳狀」。

36 同前卷一六「收河中後請罷兵狀」。

37 通鑑卷二二三貞元六年二月の條、新唐書卷二二三李師古傳。

38 陸宣公集卷一一「論兩河及淮西利害狀」

臣謂、幽・燕・恒・魏之寇、勢緩而禍輕、汝・洛・滎・汴之虞、
勢急而禍重、緩者宜圖之以計、今失於屯戍太多、急者宜備之以

嚴、今失於守禦不足、

39 通鑑卷二二三貞元三年閏五月の條

上以襄・鄧扼淮西衝要、癸亥、以荆南節度使曹王皋爲山南東道
節度使、以襄・鄧・復・郢・安・隨・唐七州隸之、

40 舊唐書卷四八

其後、諸賊既平、朝廷無事、常賦之外、進奉不息、韋臯劍南有
日進、李兼江西有月進、杜亞揚州劉賈宣州王緯・李錡浙西、
皆競爲進奉、

41 憲宗朝の例としては舊唐書卷一五九崔羣傳に

時憲宗急於盪寇、頗獎聚斂之臣、故藩府由是希旨、往往捃拾、
目爲進奉、處州刺史苗稷(積)進羨餘錢七千貫、
とある如く、戰費として重視された。

42 唐大詔令集卷一二四「平劉闢詔」

西川諸州鎮、刺史・大將及參伍(佐)・官吏・將健・百姓等、
一應被彼脅從、補署職掌、一切不問、

また通鑑卷二二七元和元年九月の條に劉闢の亂後の處理として
軍府事無巨細、命一遵韋南康故事、從容指擄、一境皆平、
とある。

43 通鑑卷二二七元和元年二月の條

癸丑、加魏博節度使田季安同平章事、
同年六月の條

44 加盧龍節度使劉濟兼侍中、己亥、加平盧節度使李師古兼侍中、
全唐文卷六四六「論河北三鎮及淮西事宜狀」

淮西四旁、皆國家州縣、不與賊通、朝廷命帥、今正其時、萬一
不從、可議征討、故臣願捨恒冀難致之策、就申蔡易成之謀、

李相國論事集卷四「鎮州淮西事宜」も同意であるが、本文章の方が簡潔になっている。

45 李相國論事集卷三「澤潞事宜」

且澤潞五州、據山東要害、河北連結、唯此制之、磁・邢・洛三州、入其腹内、國紀所在、實繫安危、

46 通鑑卷二三九元和十年十二月の條

王承宗統兵四掠、幽・滄・定三鎮皆苦之、爭上表請討承宗、

47 同前卷二四〇元和十二年五月の條

劉總既得武強、引兵出境纔五里、留屯不進、月給度支錢十五萬緡、

48 舊唐書卷一四三劉惔傳附劉總傳

及王承宗再拒命、總遣兵取賊武強縣、遂駐軍、持兩端、以利朝廷供饋賞賜、

49 白氏長慶集卷四二「請罷兵第二狀 請罷恒州兵事宜」

臣伏見、陛下比來愛人省用、發自深心、至於聖躬、每事節儉、今以府庫錢帛・百姓脂膏、資助河北諸侯、轉令富貴強大、臣每念此、不勝憤歎、

50 通鑑卷二四一元和十四年二月の條

上命楊於陵分李師道地、於陵按圖籍、視土地遠邇、計士馬衆寡、校倉庫虛實、分爲三道、使之適均、以鄆・曹・濮爲一道、淄・

青・齊・登・萊爲一道、兗・海・沂・密爲一道、上從之、

51 冊府元龜卷六〇帝王部立制度一元和十四年四月丙寅の條

詔、諸道節度・都團練・防禦・經略等使所管支郡、除本州軍使外、別置鎮遏・守捉・兵馬者、並令屬刺史、如刺史帶本州團練・

防禦・鎮遏等使、其兵馬名額便隸此使、如無別使、卽屬軍事、

52 通鑑卷二四一元和十四年四月の條に

其後河北諸鎮、惟橫海最爲順命、由重胤處之得宜故也、

とあつて横海節度使以外では效力を持たなかったことがわかる。

53 以上述べ來たつた如きテーマでの研究に王壽南『唐代藩鎮與中央關係之研究』（嘉新水泥公司文化基金會叢書）があるが、各論

點に於いて筆者の理解する所とは、かなりの相違がある。それらの點については本論の中で明らかにしていると考えられるので、特にとり上げることはしなかった。

**The Fan zhen 藩鎮 and Central Authority in
the Late Tang 唐
——especially during the Reigns of De
zong 德宗 and Xian zong 憲宗——**

Masaaki Ōsawa

In order to understand the development of Late Tang political history we must study not only the activities of the central government of the Tang 唐 state but also those of the Fan zhen 藩鎮 as local political authorities. Unless we have a thorough grasp of the relations between the Tang state and the Fan zhen powers, I think it will be difficult for us to understand historical developments from the last phase of the Tang period to Five Dynasties 五代 period. In this article I take up three representative types of Fan zhen and analyse the relations between them and the Tang state. Then, I trace political developments from the 'temporizing' policy of De zong 德宗 to the dynastic 'restoration' policy of Xian zong 憲宗

The major Fan zhens of the period can be classified into three types with respect to their attitudes towards the central authority: (A) those which aimed to be independent of the central authority; (B) those which aimed at seizing the central authority; and (C) those which supported the central authority of the Tang state. The Tang state tried to maintain and strengthen its own authority, dealing with these three types of Fan zhen in various ways, as Lu zhi 陸贄, prime minister during De zong's reign, did. The 'restoration' of the dynasty by Xian zong can be considered an extension of the aforesaid line of policy of the Tang State.

The Ortaq-qian 幹脫錢 (Loan for Ortaq) and its Background

Matsuo Otagi

During the first half of the 13th century, silver which had been